

京都大学	博士（文学）	氏名	鳥越 覚生
論文題目	ショーペンハウアー哲学における無関心の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>利害関心や我執からの離脱を貴ぶ無関心（<i>Interesselosigkeit</i>）の思想は、古来、洋の東西を問わず見てとれるものだが、市民革命と産業革命の結果として高度に発達した個人主義や利己主義が出現した西洋近代においては、「利害関心(<i>Interesse</i>)」の追求の増大と軌を一にして、それと拮抗する仕方で「無関心（性）」の概念が形成された。この術語は一般にシャフツペリやカントに始まるとされるが、カントの無関心概念には誤解を招きかねない側面があり、ヴィンデルバントによれば、この概念により適切な表現を与えたのがシラーやショーペンハウアーだとされる。にもかかわらず、従来のショーペンハウアー哲学の研究において、無関心概念の研究が主流となることはなかった。せいぜいショーペンハウアーの美の形而上学が研究される際に、カントとの関連から若干触れられる程度であった。ショーペンハウアーの無関心概念に存在や真理への通路を見出した渡邊二郎の先駆的な考察（『芸術の哲学』（1998））はあるものの、ショーペンハウアーの哲学全体を「無関心」という観点を中心に据えて解釈するという試みはなされたことがなかった。本論文が手がけるのはそのような試みである。</p> <p>主著『意志と表象としての世界』（1819）の序文で、ショーペンハウアーは、自らの哲学は「ただ一つの思想」を問題にするものだと述べている。これを典拠として、ショーペンハウアー研究では、この「ただ一つの思想」をどのように捉え、そこから彼の哲学をどのように整合的に読み解くかが問われてきた。とりわけ、ショーペンハウアー哲学を「救済論（<i>Soteriologie</i>）」として読み解いたルドルフ・マルターの仕事以来、「ただ一つの思想」を巡る論争は洗練され、現在もなお進行中である。本論文は、マルターの解釈を受け継いだ上で、ショーペンハウアーの救済論を「無関心」の哲学として再構築することを試みる。ショーペンハウアーの救済論は、人間を徹頭徹尾「生きんとする意志（<i>Wille zum Leben</i>）」に囚われたものとして描いた上で、その軛から離脱して「意志の否定」と称される寂滅の境地に安らうことを求める一種の解脱論である。そして、その障碍となる「生きんとする意志」が生存への「利害関心」と同義であることは、ショーペンハウアー研究において一般に認められている。だとすれば、この救済論において、利害関心を離れる無関心が重要な意味をもつことが予想されるのである。</p> <p>しかし、無関心の研究にはそれに特有の困難が存在する。それは、利害関心を離れて直観される無関心なもの、利害関心に囚われた私たち人間にとっては、まずもつ</p>			

て「どうでもよいもの」として現れる、ということである。利害関心の領域が、生きんとする意志に奉仕する人間知性の光に照らされた領域であるのに対して、無関心の領域は、人間知性をすり抜ける暗冥とした領域となる。自己の生存を気遣うことでもうにか生き長らえている人間にとって、生存への利害関心から瞬間的にでも離脱し、どうでもよいもの目を向けることはきわめて困難である。そうした中で、生存のために動き回ることを強られる世界の中で一瞬「佇み」、そこに利害関心からの離脱の糸口を探り続けた哲学者としてショーペンハウアーの姿を描き直すこと、それが本論文の目的としたことである。従来、ショーペンハウアー哲学の極点に位置づけられる聖者や世界克服者の「無上の無関心」は、あまりに悲観的であり、「社会的現実や実践からの遁走」だとして非難されてきた。だが、利害関心が渦巻く生存の只中において、人間が「無関心」でありうるためには、現実を見すえつつ極度の緊張を持続する必要がある。ショーペンハウアー哲学の全体像は、そうした営為に貫かれたものとしてとらえられるのである。

本論文は、主著『意志と表象としての世界』に依拠し、それに先立つ1813年の学位論文や1816年の「色彩論」も援用しながら、無関心という主題をめぐるショーペンハウアーの思索の位相を区別し、その連関をたどっていく。ショーペンハウアーはベルリン大学での講義で自身の哲学を認識論、自然の形而上学、美の形而上学、道徳の形而上学に整理しているが、無関心概念の諸相もこの区分に対応させて整理できる。すなわち、(1)「真」を扱う「科学的ないしは哲学的無関心」、(2)「美」を扱う「美的無関心」、(3)「善」を扱う「無上の無関心」の三つである。ただし、ショーペンハウアー哲学の性質上、(1)と(2)を切り離して考察することは困難である。このため本論文は、(1)と(2)を扱う第一部「哲学的無関心と美的無関心」と、(3)を扱う第二部「美的無関心から無上の無関心へ」の二部から構成されることになる。

第一部は、ショーペンハウアー哲学を「無関心」を切り口として解釈するための予備考察から始まる。まず最初に、ショーペンハウアーの生理学的な知覚論における「意志に染まらない」感覚の諸相を検討することによって、その没利害性が日常的生における無関心性の領域への通路になりうることを明らかにする(第1章、第2章)。次いで、この成果を起点としてショーペンハウアーの美の形而上学を照射することで、彼の知覚論・認識論から美の形而上学までを、一貫して「無関心」を鍵概念として読み解くことができることを示す(第3章―第7章)。具体的には、知覚論を美学論につなぐ第3章の色彩論と第4章の媒体論を基礎として、第5章から第7章では、ショーペンハウアーの美の形而上学の固有に人間論的な性格を浮かび上がらせ、そこで言われる「プラトンのイデー」の内実を明確化する。美にまつわる「イデー」は、現に人間が生きている利害関心の世界を離れてとらえられるものではない。そこで人間を動かす「生きんとする意志」が一瞬沈黙する時、人間のかかわる対象が「単

なる表象」としてその没利害的な「仮象(Schein)」性において「輝く(scheinen)」。

これが美的無関心の下で立ち現れる「イデー」にはほかならない。ここにおいて、感性的であると同時に理性的である人間が、動物的な生存に墮することなく、精神的な世界にあずかるという困難な事が可能になる。こうして美的無関心の救済論的な射程が確認されることになる。

以上の成果を踏まえて、第二部では、美的無関心がショーペンハウアーにとって最高度に真剣なものであるべき実践の領域、すなわち善と聖の領域にどのように関わっていくかを問題にする。この領域の極点が生きんとする意志から解脱した「無上の無関心」であるから、「美的無関心から無上の無関心へ」の道程を跡づけ、両者の緊密な関係においてショーペンハウアーの無関心の哲学を浮かび上がらせることが、この第二部の主題となる。

第二部の考察は以下の順序で進められる。まず最初に、第一部との接点を確保するために、ショーペンハウアーにおける美と善の問題の関係を考察し、独自の悲劇的世界観、悲観論が両者に共通する基盤となっていることを確認する。その上で、悲哀と苦しみを基調とするこの世界において、ショーペンハウアーがいかにして善や聖を位置づけていたかを見定める。これによって、美的無関心と無上の無関心の途上にあるものとして、苦悩の世界のただ中における「同情＝共苦(Mitleid)」の共同性の重要性が浮かび上がり（第9章）、この次元のたえざる途上性と二重性が、ショーペンハウアーの人間観と世界観を貫いていることが明らかになる（第10章）。これらの一連の考察により、自己の苦悩から遁走することなく、苦しみの世界の中で没利害的に現実を直視しようとする努力がショーペンハウアー哲学に通底するものであることが示されるのである。

とはいえ、この努力が「無上の無関心」にあずかることによる宗教的な救済を終極点に置き、しかもそれを人間の努力を超え、人間に飛来する一種の神秘としてとらえていることは事実である。それゆえに、道徳的な善の領域と宗教的な救済との接点がどこに求められるかがなお問題になる。この点を考究する時、「禁欲」がそのための鍵概念となっていることが明らかになってくる（第11章）。この禁欲を導くのが美的無関心の涵養する「幽けきもの」への眼差しであり、これを導きとして禁欲に到れたならば、現実世界に対してはどこまでも隠れたものである聖者の善行の世界、いわゆる〈冥加〉の領域への扉が開かれる。このようにして、ショーペンハウアー哲学自体はどこまでも無上の無関心への「途上」にあり続けるとしても、その深奥に「無上の無関心」との関係が隠れた形で作動していることが見て取られるのである（第12章）。

以上の道程から、ショーペンハウアーの無関心哲学が「哲学的ないしは美的無関心」の上に「無上の無関心」を頂く二部構造をなしていることが明らかになる。それ

は、美的無関心における没利害的なものへの眼差しの転換を契機として、無上の無関心の冥き深みへと向かう途上としての性格を基本とするのである。そこには、利害関心に翻弄される生存競争のただ中で生きる身の上でありながら、利害関心に振り回されることをよしとせず、世界から距離をとり、悲劇的な世界を直視し続けるという大いなる緊張が張り渡されている。この意味で、無関心哲学としてのショーペンハウアー哲学は、単なる現実逃避の悲観主義ではない、隠れた積極性を有するのである。

(論文審査の結果の要旨)

ショーペンハウアーの哲学は、人間を徹頭徹尾盲目的な「生きんとする意志(Wille zum Leben)」に囚われたものとして描きつつ、この根源苦からの離脱を仰望するその悲観論的世界観の牽引力により、学術的な哲学研究の枠を超えて多くの人々を引きつけ、繰り返し新たな仕方で受容されてきた。しかしその一方で、ドイツ観念論の他の哲学者たちの場合と同様、ショーペンハウアー哲学の専門研究は精緻化の一途を辿り、遺稿の細部にわたる文献的検討によって成果を上げる反面、この哲学の中心的問題と正面から渡り合い、その意義を新たに描き直すようなスケールの大きい研究が難しくなってきたことも事実である。こうした状況の中で、本論文は、この哲学の全体を「無関心(Interesselosigkeit)」概念という全く独自の切り口から組織的に読み直し、その描像を新たにするという野心的な課題に挑戦している。

主著『意志と表象としての世界』(1819)の序文において、ショーペンハウアーは、自らの哲学は「ただ一つの思想」を問題にするものだと述べている。これを典拠として、ショーペンハウアー研究では、この「ただ一つの思想」をどのように捉え、そこから彼の哲学をどのように統合的に読み解くかが問われてきた。本論文は、これを「救済論(Soteriologie)」として読み解いたルドルフ・マルターに従いつつも、この救済論を「無関心」の哲学として再構築することを試みる。ショーペンハウアーにおける救済が、「生きんとする意志」から離脱し意志自体が寂滅する境地に安らうことであり、この意志が生存への「利害関心(Interesse)」と同一視できるとすれば、その救済論において、人間を利害関心から離れさせる「無関心」が重要な意味をもつはずだからである。

このような見通しの下で、本論文は、ショーペンハウアーが無関心という主題を展開する場面を、(1)生理学的知覚論や哲学的認識論における「科学的ないしは哲学的無関心」、(2)芸術論や美の形而上学における「美的無関心」、(3)意志の寂滅を体現する「無上の無関心」の三つに区分する。その上で、(1)と(2)を連続的に扱う第一部「哲学的無関心と美的無関心」と、(2)から(3)への移行を扱う第二部「美的無関心から無上の無関心へ」の二部構成とする。

第一部では、主著の前史というべき1813年の学位論文や1816年の「色彩論」から論じ起こし、年代的にも事象の階層という点でも順を追って考察を進める。まずは初期の生理学的な色彩知覚論を読み解き、そこに「意志に染まらない」という意味で「高貴な」感覚とされる視覚の位置づけを見いだす。そして、そのような視覚が潜在的に含む没利害性を顕在化するものとして、「芸術における色彩記述」がもち出されるのだとする。その上で、ショーペンハウアー美学において理解の難しい「プラトンのイデー」について、「透明な色彩」と連関づけることにより理解を試みる。すなわち、色彩の美がそれを感受する者の生を一瞬なりとも利害関心から離脱させる時、この無関心性は色彩を「透明」化し、仮象のままでイデーを輝かせる「媒体」と化するのである。このような経路を通して、美的無関心にひそむ救済論的射程が掴み

だされることになる。以上の論展開は、首尾一貫性と説得力をもっており、「無関心」という主題からショーペンハウアー哲学を読み解くという手法の効力を証していると言えよう。

第二部では、この美的無関心から「無上の無関心」への道程、というよりもむしろ、つねにこの二つの極の「間」に位置するものとして、無関心の救済論的意義を描き出すことが試みられる。そこで明確化されるのは、本質的に観想的なものである美的無関心と、苦の世界を全く超脱したかにみえる「世界克服者」の無上の無関心の間に、苦の世界のただ中における「同情＝共苦(Mitleid)」の共同性としての実践の次元が広がっていることである。本論文の白眉は、この次元のたえざる途上性と二重性がショーペンハウアーの人間観と世界観を規定するものであることを、さまざまな角度から論証していく考察である。そうした考察を通して、無上の無関心はつねに「冥き深み」に隠れており、世界から退いてそこに逃げこむことはできないものであって、むしろ自己の苦悩から遁走することなく、苦しみの世界のただ中で没利害的に現実を直視しつづけようとする努力こそが、ショーペンハウアー哲学を特徴づけるものであることが示されるのである。

以上のように、無関心という独自の切り口から、近年の研究もふまえつつ新たなショーペンハウアー像を提示しようとする本論文は、数々の印象深い洞察を含んだ魅力的な研究となりえている。惜しむらくは、とくに第二部において、そうした洞察の一つ一つが十分に展開されないままに論が動いていき、十分に詰め切れないまま残されている論点が散見することである。また、肝心な所で叙述がいささかエッセイ的になり、論の詰めの甘さを美文によって覆い隠す方向に流れているのも残念な点である。とはいえ、こうした問題点は論者自身が十分自覚している所であり、今後の研鑽によって克服されていくだろうと期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2020年12月11日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。